明治時代の四本柱の四色

根　間　弘　海

1.　はじめに[1]

四本柱が四色になったのは、安政 5 年（1858）春場所以降である[2]。幕末まで、その四色が続いていた[3]。明治以降は、どうなったであろうか。拙稿「四本柱の色」(2005) で、明治 20 年代は四本柱の色が確認できないと述べたが、その後、注意して見ると、やはり明治時代はずっと、四色が続いていることが分かった。その証拠を本稿では提示する。「四本柱の色」（2005）以降も文字資料はあまり増えていないが、絵図資料はかなり増えている。本稿では勧進相撲の四本柱の色だけが対象になっているが、勧進相撲以外の相撲では、もちろん、四色、紅白色、それに赤色も使われている。

明治時代に書かれた相撲の本にはある時期、四色ではなく紅白色や赤色の四本柱も使われたという趣旨の記述をしてあるものもあるが、それは事実に反することも指摘する。四色で描かれた錦絵が豊富にあるだけでなく、四色の使用を述べてある文字資料もあるからである。

---

[1] 錦絵では山室猪佐三氏と香山磐根氏に随分お世話になった。ここに改めて、感謝の意を表する。中には、公刊されている本で見ることのできない錦絵も数枚あった。本稿で取り上げた錦絵は「山室所蔵」あるいは「香山所蔵」として記してある。

[2] この年月は『江戸相撲錦絵』（p.98）で指摘されているが、同じ年月は香山氏「四本柱の色の変遷」（S60.4~S61.8）でも指摘されている。『江戸相撲錦絵』の解説は香山氏が執筆している。なお、安政 5 年春場所を描いた錦絵「勧進相撲大相撲興行之図」（豊国筆）は『相撲』（保育社、pp.92-3）で見られる。

[3] 四本柱の色の故実については江戸時代の写本で知ることができる。最も古い写本には『相撲家伝鈔』（正徳 4 年）がある。その他には『古今相撲大全』（宝暦 13 年）、『相撲伝秘書』（安永 5 年）、『大相撲評判記』（天保 7 年）などにも四本柱の故実が記述されている。その故実が今日まで生きていると言ってよい。よく指摘されることだが、江戸時代の勧進相撲でもずっと四色の四本柱が使われていたわけではない。

本稿の論考を証明するのに活用した資料は、主として、錦絵のような「絵図資料」である。特に明治 30 年代までは錦絵が豊富に描かれていて、その中には土俵の様子を明確に確認できるものも少なくない。特に色の確認となれば、色がはっきり分かる錦絵に勝るものはない。文字資料としては新聞や書籍になるが、四本柱について述べてあるものは極端に少なくなる。新聞であれば、書かれた当時の四本柱の色が即座に判断できるが、それを見つけるのは至難の業である。本ではそのような箇所を簡単に見つけられるが、それが事実を反映しているかとなると、即座に首肯できない場合もある。「孫引き」の可能性があるからである。

本稿で対象とする相撲は、主として、いわゆる普通の「勧進大相撲」である。すなわち、一般の人が入場料を払って観戦を楽しむ大相撲である。しかも明治以降の東京相撲に限定してある。したがって、天覧相撲、奉納相撲、慶事相撲、大阪相撲、京都相撲などは対象外となる。さらに、江戸相撲も対象外である。相撲の種類が違うと、使用する柱の色も異なることがある。明治初期には、東京相撲、大阪相撲、京都相撲ではそれぞれ四本柱の色も異なることがあったようである。

本稿では、四本柱の色を確定するため、白黒印刷された錦絵ではなく、できるだけオリジナルの錦絵やカラー刷りした錦絵を調査することにした。柱の色が一つも確定できない錦絵は調査の対象から外した。本稿で記してある錦絵はすべて、実際に私が直に確認できたものばかりである。白黒印刷の錦絵や写真でも色の濃淡や方角などから色をある程度確定できるが、そうしなくても数多くの錦絵を調べることができた。しかもよく注意して調べると、明治 2 年から明治 45 年まで継続して使われていた色を確認できるほど貴重な錦絵を見つけることができた。四本柱の色の流れを調べるには、これだけの錦絵があれば十分である。

2.　明治 2 年から明治 9 年までの四本柱

この期間に四本柱が何色だったかを述べた文字資料は、残念ながら、見つけられなかった。相撲の本は何も出ていないはずなので、見つけられるとす

れば、新聞が第一候補である。しかし、この期間に出ている新聞でも相撲はおろか、四本柱の色などに言及した記事は期待できない。しかし、錦絵であれば、いくらか見つかる。

(1) 錦絵「鬼面山横綱土俵入之図」、明治 2 年～3 年[4]、国輝画、『江戸相撲錦絵』(p.65) ／『図録「日本相撲史」総覧』(pp.34-5)。

露払い・五月山、太刀持ち・小柳。2 本柱が白と緑で、1 本の色は不明。もう 1 本は描かれていない。四本柱は四色として推定[5]。水引幕は描かれていない。木村庄之助は紫房で、帯刀している[6]。

(2) 錦絵「勧進大相撲土俵入図」、明治 5 年 3 月、国輝筆、山室所蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫で、揚巻はない[7]。庄之助は背中を向けて、蹲踞している。

西：綾瀬川、小柳、朝日嶽、鯱の海、佐野山[8]

東：境川、雷電、大纏、高砂、四海波

錦絵の届け日は明治 5 年 3 月だが、番付は明治 6 年 4 月に近い。

---

[4] 鬼面山の横綱在位期間は明治 2 年 2 月から明治 3 年 11 月である。この錦絵は明治 2 年に描かれたとする記述もあるが、それが正しいのかどうか確認するすべがない。

[5] 錦絵では柱が四本描かれているとは限らない。1 本でも下部が赤色、上部がそれと異なる色であれば、四色だと推定してある。中には同じ色が 2 本混じっていることもあるが、それも「四色」としてある。しかし、上部と下部の色が「赤一色」の場合、上部と下部の色が不明なので、調査の対象からは外してある。

[6] 行司の帯刀する「刀」は時代によって異なる。たとえば、明治 9 年までは「帯剣」、明治 43 年までは「木刀」、その後は「短刀」とするほうが事実に近いが、本稿ではその区別をほとんどやっていない。帯刀しているかどうかが分かればよいので、用語にこだわっていない。

[7] 水引幕が描かれていても、揚巻のないものがある。揚巻がいつ頃から常に吊るされるようになったかは必ずしも定かでない。『朝日』(M23.5.29) の記事に四色の揚巻が吊るされたことが記されていることから、その頃までには勧進相撲でも揚巻が吊るされるようになっていたはずだ。明治 20 年までの錦絵で見る限り、揚巻が吊るされていないのが普通である。明治 17 年 3 月の天覧相撲では、揚巻が吊るされているが、それは「特別な」相撲だからである。明治 17 年当時あるいはそれ以前から勧進相撲でも揚巻を常に吊るしていたかどうかは、もう少し調べる必要がある。

[8] 錦絵ではときどき取組んでいる力士名を上部に記載してある力士名一覧ではブランクにしてある。四角で囲んである力士は相撲を取組んでおり、その力士名は絵の中で記載されている。

(3) 錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 5 年 3 月、国輝筆、山室所蔵[9]。

四本柱は四色。水引幕は紫色で、揚巻はない。木村庄之助は背を向けているが、帯刀している。背の後方に剣の先が突き出ている。

西：象ケ鼻、大纏、小柳、高砂

東：綾瀬川／境川、両国、朝日嶽

(4) 錦絵「勧進大相撲繁栄之図」、明治 5 年 4 月、国輝筆、山室所蔵。

四本柱は四色。水引幕は黒で、揚巻はない。式守伊之助は赤房で、帯刀している。

西：象ケ鼻、大纏、高砂、兜山、鬼ケ崎、佐野山、荒馬

東：国見山、鷲ケ濱、山分、勝山、鯱ノ海、両国

この番付は 1 月場所に準じている。

(5) 錦絵「大相撲取組之図」、明治 6 年 4 月、国輝画、田原町博物館編『相撲錦絵』(pp.22-3)。

境川と小柳の取組。白黒印刷だが、白柱は明確で、他の 2 本の色は不明。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。行司は草履を履き、帯刀している。

西：綾瀬川、小柳、朝日嶽、鯱の海

東：境川、雷電、大纏、高砂、磐石

高砂が東京相撲を脱退する前の番付である。

(6) 錦絵「相撲取組之図」、明治 8 年 5 月、国輝筆、山室所蔵。

境川と小柳の取組。四本柱は四色。水引幕は描かれていない。式守伊之助は赤房で、草履を履き、帯剣している。

東：境川、雷電、大纏、佐野山、四海波、勝浦

西：綾瀬川、朝日嶽、鯱ノ海、小柳、浦風

この番付は明治 8 年 5 月に一致する。

---

[9] 同じ錦絵が『相撲今むかし』(pp.60-1) にある。白黒の錦絵でも色の濃淡から四本柱が四色であることは識別できる。

(7) 錦絵「大相撲引分之図」、明治 9 年 4 月、国明筆、学研『大相撲』(p.142)[10]。

境川と梅ケ谷の取組。1 本の柱は緑色。もう 1 本の色は不明。他の 2 本は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。式守鬼一郎は紅白房で、草履を履かず、足袋だけで、帯刀している[11]。境川は明治 9 年 12 月に横綱になり、明治 14 年 1 月に引退している。

(8) 錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 9 年 5 月、国明筆、『図録「日本相撲史」総覧』(pp.38-9)。

四本柱は四色。水引幕はあるが、揚巻はない。行司は北を背にし、土俵上で蹲踞している。

西：綾瀬川、朝日嶽、鯱ノ海、小柳、梅ケ谷

東：境川、雷電、大纏、浦風、若島、四海波

錦絵が示すように、明治に入っても幕末と同様に、四本柱は四色である。

3. 明治 10 年から明治 19 年までの四本柱

『角觝秘事解』(M17) には、次のような記述がある。

「四本の柱は東西南北、四時春夏秋冬を象り、東は木にして即ち青くして春なり、西は金にして白く秋なり、南は火にして赤く夏な

---

[10] 同じ画題「大相撲引分之図」で異なる錦絵があるが、力士は梅ケ谷と西ノ海である。届け日も同じ明治 9 年 4 月で、行司も式守鬼一郎である。要するに、力士だけを変えて描いている。この錦絵は力士名から明治 10 年代後半のものである。もちろん、四本柱は四色として判断できる。因みに、梅ケ谷の最終場所は明治 18 年夏場所であり、庄三郎（4 代）は明治 18 年 1 月まで名乗っていた。西ノ海は明治 15 年春場所、「幕内」につけだされている。梅ケ谷と西ノ海の取組は調べていないが、この錦絵の登場人物の背景を見る限り、事実を描いていないようだ。

[11] 式守鬼一郎が帯刀していることから、この錦絵は廃刀令（明治 9 年 3 月）を忠実に守っていない。この錦絵は廃刀令の前に描かれたか、廃刀令を無視したかである。廃刀令までは立行司だけでなく、上位の行司は帯刀して土俵に上がることができた。鬼一郎は第三席だが草履を許されていないことから、廃刀令後であれば帯刀できなかったはずだ。

り、北は水にして黒く冬なり」（p.7）

この記述の通り、この期間は間違いなく四本柱は四色である。この期間の文字資料が他にもないか調べてみたが、残念ながら、見つけることができなかった。本としては、たとえば『相撲大要』（M18）もあるが、四本柱の色については何も言及していない。しかし、この時期は横綱境川が活躍したり天覧相撲（M17.3）が開催されたりしているせいか、錦絵が意外と多い[12]。

(1) 錦絵「境川横綱土俵入之図」、明治 11 年 4 月、国明筆、出版人・山本与市、私蔵[13]。

露払い・龍門、太刀持ち・勢[14]。白色と黒色の 2 本柱。残りの 2 本柱は描かれていないが、四色として推定。水引幕は描かれていない。木村庄五郎は烏帽子で、軍配房は紫色だが、草履を履いていない。紫房で横綱土俵入りを引く行司が草履を履いていないのは不自然。庄五郎は明治 11 年 4 月当時、紫房でもなかったし、草履を履いていなかった。この錦絵を取り上げたのは、明治 11 年 4 月当時、四本柱が四色だったことを示すためである。

(2) 錦絵「境川横綱土俵入之図」、明治 11 年 4 月、国明画、私蔵。

露払い・勢、太刀持ち・勝ノ浦。白色と黒色の 2 本柱。残り 2 本柱は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村庄之助は紫房で、烏帽子を被らず、扇子を差している。

---

12 横綱境川の在位期間は明治 10 年 2 月から明治 14 年 1 月である。しかし、不思議なことに、錦絵の届け日はほとんど明治 11 年となっている。明治 12 年から明治 13 年の届け日が記された錦絵はあまり見られない。これには何か原因があるはずだが、それがまだ分からない。吉田追風は明治 10 年から明治 14 年まで西南の役に参戦し、東京相撲から離れているが、それが原因だとも思われない。というのは、その間も東京相撲は行なわれていたからである。

13 「私蔵」は私が所蔵しているものである。実物は少ないが、写真がたくさんある。公刊された本で見られる錦絵は出典を明記するように務めたが、カラーの場合は「私蔵」として記した。四本柱の色は白黒ではなく、カラーで確認するのがよい。

14 境川横綱土俵入りの錦絵では、多くの場合、勢は露払いとして描かれているが、この錦絵では太刀持ちとして描かれている。

(3) 錦絵「境川横綱土俵入之図」、明治 11 年 4 月、国明筆、私蔵。

露払い・四海波、太刀持ち・手柄山。白と黒の 2 本柱。他の 2 本は描かれていない。四本柱は四色と推定。水引幕は描かれていない。木村庄之助は赤房で、扇子を差している。

(4) 錦絵「境川横綱土俵入之図」、明治 11 年 4 月、国明筆、学研『大相撲』(pp.142-3)。

露払い・四海波、太刀持ち・勝ノ浦。白と黒の 2 本柱。他の 2 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。式守伊之助は赤房で、扇子を差している。

(5) 錦絵「勧進大相撲取組之図」、明治 11 年 5 月、国明筆、私蔵。

梅ケ谷と境川の取組。白柱が 2 本で、緑柱と黒柱が 1 本ずつ。四本柱は四色として推定。水引幕は紫で、揚巻はない。木村庄之助は草履を履き、帯刀していない。軍配は描かれていないので、房の色は不明。

西：朝日嶽、鯱ノ海、大纏、武蔵潟

東：若島、浦風、勝ノ浦、手柄山

(6) 錦絵「勧進大相撲取組之図」、明治 13 年 5 月、国利画、山室所蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫で、揚巻はない。行司は帯刀している。

西：梅ケ谷、武蔵潟、司天竜、鞆ノ平、清見潟

東：若島、手柄山、若虎、響矢、関ノ戸

この錦絵は届け日が明治 13 年 5 月となっているが、番付は明治 14 年 5 月である。

(7) 錦絵「勧進大相撲取組之図」、明治 13 年 5 月、国利画、出版人・井上茂兵エ、私蔵。

白色が 2 本。赤と黒が 1 本ずつ。四本柱は四色として推定。水引幕はあるが、揚巻はない。取組んでいる力士名と裁いている行司名

は不明。行司は帯刀し、草履を履いている。草履を履き、帯刀した行司の軍配房が青色で描かれているのは、不自然である。

西：梅ケ谷、司天竜、高見山、鞆ノ平、千羽ケ嶽

東：若島、手柄山、武蔵潟、荒虎、関ノ戸

この錦絵の届日は明治 13 年 5 月となっているが、上部の番付に記載されている力士名を見る限り、明治 15 年 1 月場所である[15]。届け日が明治 13 年 5 月で、別の錦絵があるかもしれない。いずれにしても、明治 13 年か明治 15 年頃には四本柱は四色である。

(8) 錦絵「勧進大相撲繁盛之図」、明治 15 年 1 月、『昭和大相撲史』の口絵。

梅ケ谷と若島の取組。白と黒の柱が 1 本ずつ。他の 2 本の柱も描かれているが、上部の色は不明。水引幕は描かれているが、揚巻は不明。行司は赤房で、草履を履き、帯刀している。

西：梅ケ谷、司天竜、高見山、鞆ノ平、千羽ケ嶽

東：若島、手柄山、武蔵潟、荒虎、関ノ戸

上の錦絵「勧進大相撲取組之図」と構図が酷似しているが、細かい点でいくつか異なり、日付だけを変えているわけではない。たとえば、行司の位置が異なるし、取組んでいる力士の姿勢も異なる。櫓の位置も異なる。まったく別の錦絵だと言ってよい。

(9) 錦絵「勧進大相撲取組之図」、明治 15 年 5 月、国明筆、私蔵。

大鳴門と梅ケ谷の取組。四本柱は四色。水引幕はあるが、揚巻はない。木村庄三郎は紫房で、帯刀と扇子を差している。

西：梅ケ谷、鞆ノ平、高見山、清見潟、柏戸

東：手柄山、楯山、大鳴門、武蔵潟、千羽ケ嶽、緋縅

[15] 錦絵の力士が明治 15 年 1 月に準じていることから、それを明治 13 年 1 月のものとして扱うのには不適切かもしれない。錦絵にはときどき届け日と力士名が一致しないことがある。そのような場合には、おそらく、届け日に発行された錦絵があるはずだ。すなわち、同じ届け日で 2 つの異なる錦絵があることになる。

(10)　錦絵「大相撲土俵入之図」、明治 15 年 10 月、国明画、私蔵。

四本柱は四色。水引幕はあるが、揚巻はない。木村庄之助は北側に背を向けている。帯刀は不明。

(11)　錦絵「當今流行揃」の一コマ「相撲興行之図」、明治 15 年、出版人・佐脇金次郎／『江戸・明治・大正　大相撲グラフィティー』(p.43)。

四本柱は四色。水引幕はあるが、揚巻はない。行司は草履を履いている。取組んでいる力士名と裁いている行司名は不明。

(12)　錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 16 年 1 月[16]、国明筆。私蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫だが、揚巻はない。庄之助は背中を向けている。帯剣は不明。

西：梅ケ谷、鞆ノ平、大鳴門、関ノ戸、千羽ケ嶽

東：楯山、武蔵潟、手柄山、大達、高見山

この錦絵の届け日は文字が不鮮明である。上部の番付によれば、明治 16 年 1 月場所である。

(13)　錦絵「大相撲取組之図」、明治 17 年 5 月[17]、国明画、私蔵。

西ノ海と大鳴門の取組。2 本は赤と青。四本柱は四色として推定。式守与太夫（3 代）の房の色は定かでないが、どちらかというと赤房である。草履は履いていないが、帯刀の有無は分からない。7 代式守伊之助は明治 16 年 8 月に亡くなっているが、式守与太夫は春場所では遠慮して、短刀を差さなかったかもしれない。式守与太夫が 8 代式守伊之助を継いだのは、明治 17 年 5 月場所である。しかし、草履を履いていないのはなぜなのか、はっきりしない。

(14)　錦絵「勧進大相撲取組之図」、明治 17 年 5 月、国明筆、私蔵。

---

16 錦絵の番付から明治 16 年 1 月としたが、正確な年月は定かでない。

17 この錦絵は明治 17 年 5 月場所を迎える前に描かれている可能性がある。5 月場所を描いているとすれば、草履を履き、短刀を差しているはずだからである。

四本柱は四色。梅ケ谷と大鳴門の取組。水引幕は紫だが、揚巻はない。木村庄三郎は紫房で、帯刀し、草履を履いている。

西：梅ケ谷、鞆ノ平、高見山、清見潟、柏戸、上ケ汐

東：手柄山、楯山、大鳴門、武蔵潟、千羽ケ嶽、緋縅

(15) 錦絵「梅ケ谷横綱土俵入之図」、明治 17 年 5 月[18]、国明画、大谷孝吉コレクション『相撲浮世絵』(p.83)。

露払い・剣山、太刀持ち・大鳴門。緑柱が 1 本で、もう 1 本の色は不明。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。行司庄三郎は帯剣で、草履を履き、烏帽子は被っていない。

(16) 錦絵「勧進大相撲土俵入図」、明治 17 年 5 月、国明画、山室所蔵。

四本柱は四色。1 本は黄色だが、白色の代わりに違いない。水引幕は紫だが、揚巻は描かれていない。

西：楯山、西ノ海、大達、緋縅、高見山

東：梅ケ谷、大鳴門、剣山、鞆ノ平、手柄山

この錦絵は御届明治 16 年 1 月となっているが、番付は明治 17 年 5 月である。

(17) 錦絵「大相撲弓取之図」、明治 18 年 1 月、「新版相撲つくし」の一コマ、出版人・小森宗次郎、私蔵。

緑柱が 1 本。他の 3 本とも描かれているが、上部の色は不明。四本柱は四色として推定。水引幕はない。

(18) 錦絵「大相撲興行繁盛之図」、明治 18 年 5 月、国利画、山室所蔵。

剣山と高千穂の取組。緑柱と黒柱が 1 本ずつ。他の 2 本も描かれ

---

[18] 横綱梅ケ谷の在位期間は明治 17 年 3 月から明治 18 年 11 月である。明治 17 年 3 月の天覧相撲に合わせて梅ケ谷に横綱免許が授与されている。次の横綱は西ノ海だが、横綱になったのは明治 23 年 3 月である。つまり、明治 18 年 12 月から明治 23 年 2 月まで横綱がいなかったことになる。横綱がいない場合、横綱土俵入りの錦絵はないので、その代わり幕内土俵入りとか取組などを描いた錦絵が多くなる。

ているが、色は不明。四本柱は四色として推定。水引幕はあるが、揚巻は不明。行司の房の色や帯刀の有無は確認できない。

西：梅ケ谷、剣山、大鳴門、鞆ノ平、上ケ汐、武隈

東：西ノ海、大達、高千穂、高見山、一ノ矢、緋縅

(19)　錦絵「大相撲取組之図」、明治 18 年 6 月、国明画。

増位山と伊勢ケ浜の取組。青柱、緑柱、黒柱、赤柱が 1 本ずつで、白柱がない。四本柱は四色として推定。水引幕は赤色で、揚巻はない。木村庄五郎は朱房で、草履を履き、帯刀している。

(20)　錦絵「梅ケ谷横綱土俵入」、明治 18 年 6 月、国明画、山室所蔵。

露払い・友綱、太刀持ち・大鳴門。赤柱と黒柱の 1 本ずつ。他の 2 本は描かれていない。水引幕はない。庄之助は烏帽子を被っている。

(21)　錦絵「大相撲土俵入図」、明治 19 年 4 月、国利筆、山室所蔵。

四本柱は四色。水引幕はあるが、揚巻はない。行司は背を向けて蹲踞しているが、短刀を差している。剣の先が背の後ろに突き出ている。

西：剣山、大鳴門、鞆ノ平、海山、友綱

東：大達、西ノ海、高千穂、一ノ矢、常陸山

これだけの錦絵を見れば、四本柱が四色だったことは認めなければならない。天覧相撲では、確かに紅白が使われているが、それは相撲の種類が違う。勧進相撲では四色を使うのが定めであり、それ以外の相撲では紅白色や赤色を使う傾向がある。

4.　明治 20 年から明治 29 年までの四本柱

この期間には文字資料がこれまでより増えているが、すべてが四本柱の四

色を裏付ける記述になっているわけではない。相撲を詳しく取り扱った書籍の中には、四色の代わりに「紅白色」や「赤色」が使われていると書いてあるものもある。

この期間の四本柱は本当に四色ではなく、「紅白色」や「赤色」だったのだろうか。「四色」は使われていなかっただろうか。それとも、どの色も混在し、どれを用いてもよかったのだろうか。どれが事実かを確認するために絵図資料や文字資料を再訪することにした。そして、一つの結論に達した。それは、「紅白色」や「赤色」の記述をしてある本は江戸時代の写本の故実を「孫引き」し、そこで述べてある四本柱の色をそのまま取り入れてあるということである。故実の由来を写本に依存したが、その後、四本柱の色に変化があったにもかかわらず、その写本の色までもそのまま受け継いだのである。江戸時代の写本が書かれた当時、四本柱の色は主として「赤色」だった。

この期間に見つかった文字資料をいくつか列挙してみよう。

(1) 『朝日』(M23.5.29)

「(前略)天幕を四本柱に張り出し紅白青黒四色の揚巻を以て絞り上げしは頗る見事ななりし」

これは四本柱ではなく、揚巻の色について言及してあるが、揚巻 4 本の色が違うという事実である。つまり、揚巻の色がすべて違うのは、その色が隣の柱の色と一致したことを示している。したがって、四本柱の色は四色だったことを裏付けている。すなわち、明治 23 年当時、四本柱は四色だったのである。それは、絵図資料でも裏付けられる。明治 24 年の「天幕開き」の錦絵では、四本柱は四色で描かれている。

(2) 『相撲宝鑑』(M27)

「四本柱は元四季を表せしものにして古は東を春とし青き絹を以て巻き、西を秋とし白き絹を以て巻き、南を夏とし赤き絹を以て巻き、北を冬とし黒き絹を以て巻く古例なりしと早晩物好きの思いつきよりして四本とも一様に赤き絹を巻き、その上を白き絹または白木綿にてぐるぐると巻くこととなれるなり」(p.18)

次に見るように、四本柱の色に関する記述は、江戸時代に書かれた写本の記述とよく似ている。

・　『大相撲評判記』（天保 7 年）

「（東西南北は青白赤黒でそれぞれ巻く：ＮＨ）これが古例なれども、その後風流の物好きより一様に赤き絹または毛氈にて巻き、その上を白き絹または白き木綿にて巻くこととなりぬ。」

この写本がどれを基に書いたかは分からないが、天保のころの四本柱は「紅白色」というより「赤色」が普通だった。少なくとも、錦絵を見る限り、「赤色」の方が「紅白色」よりずっと多い。『相撲宝鑑』（M27）では、四本柱の故実の由来を述べるのが目的だったが、四本柱の色までそのまま取り入れてしまったのである。明治 27 年当時、勧進相撲の四本柱は四色だったからである。

(3)　『相撲沿革史』（M28）

「四本柱はこれを四季に表す。東は春にてその色青色、西は秋にて白色、南は夏にて赤色、北は冬にて黒色なれば、そのいろいろの絹を以て巻くを差別とす。然れども上覧相撲の風流に慣れてついに一様の色絹に巻くもあり」（p.105）

これも江戸時代の写本を活用して書いたに違いない。どの写本かは分からないが、たとえば、次の写本には似たような表現がある。

・　『古今相撲大全（下巻）』（宝暦 13 年）

「四本柱は四季に表す。東は春にてその色青色、西は秋にて白色、南は夏にて赤色、北は冬にて黒色なれば、その色々の絹を以って巻き差別とす。御前相撲の風流なる物好きより遂に一様の色絹にて巻くようになりたり。」

この「一様の色絹」は、錦絵などから判断する限り、「赤色の絹」のことである。この写本が書かれた宝暦のころは、四本柱は赤色が普通だった。「紅白

色」は非常に少ない。その意味では、写本の記述は事実を正しく記述している。『相撲沿革史』（M28）では四本柱の故実を紹介しているが、当時の四本柱の色を実際に確認していなかった可能性がある。宝暦のころの四本柱の色は正しくても、それまでに「色」は変わってきたのである。その色の変遷を認識していながら、明治 28 年当時も「赤色」だったとすれば、どれが本当のことだったかを問わなければならない。

明治 28 年当時の新聞記事に四本柱の色が書いてあれば、それによって、『相撲沿革史』（M28）に述べてあることが正しいかどうかを判断することができる。しかし、私はそのような当時の新聞記事をまだ見ていない。四本柱の色を判断する資料として錦絵では、明治 28 年の前後、四本柱は四色である。それだけで、十分な論拠である。他に文字資料が見つかれば、それにこしたことはないが、それが見つからなくても根拠は揺るがない。

なお、四本柱の四色について記述してある写本の中で最も古いのは、『相撲家伝鈔』（正徳 4 年）である。約半世紀後に世に出た『古今相撲大全（下巻）』（宝暦 13 年）が引用されるが、それは『古今相撲大全』の現代版が明治 18 年に出版されているからであろう。『相撲家伝鈔』（正徳 4 年）は、実際、その一部が酒井著『日本相撲史（上）』に紹介されている程度である[19]。いずれにしても、『相撲家伝鈔』の中に次のような記述がある。

> 「南の柱を赤き布を以って巻き夏を表し、火にとる。北の柱を黒き布にて巻き、冬と申し、水なり。東は青く春にして木を表し、西は白布、秋、金なりとし、土の色は、すなわち地形に基づいて五行の配当と申す。」

明治 20 年から 29 年の間に描かれた錦絵はたくさんあるが、実際に確認できたものを次に示す。

(1) 錦絵「阿州剣山谷右衛門」（一人姿）、明治 20 年 1 月、山室所蔵。
緑の柱が 1 本で、他の 3 本は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕はない。

---

19 『相撲家伝鈔』の写本にはいくつかバージョンがあるが、その中のいくつかは両国の相撲博物館にもある。

(2) 錦絵「勧進大相撲土俵入図」、明治 20 年 5 月、国明筆、山室所蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫色で、揚巻はない。木村庄之助は背を向けて蹲踞している。

東：海山、鶴ノ濱、八幡山、千羽ケ嶽、綾瀬川、知恵ノ矢

西：大達、一ノ矢、西ノ海、友綱、高千穂、嵐山

(3) 錦絵「顔触れ之図」、明治 21 年、国明画、山室所蔵。

上部の赤柱が 1 本で、他の 3 本は不明。四本柱は四色として推定。顔触れの取組は海山・嵐山、八幡山・若湊となっている。伊之助は帯刀している。呼出し・藤兵衛。

(4) 錦絵「西ノ海横綱土俵入」、明治 23 年[20]、春宣筆、山室所蔵[21]。

露払い・千年川、太刀持ち・綾浪。緑柱が 1 本で、他の 1 本は不明。残り 2 本は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村庄之助は帽子を被らず、帯刀している。

(5) 錦絵「梅ノ谷土俵入之図」、明治 24 年 1 月、春斎筆、学研『大相撲』(p.168)。

横綱梅ケ谷の入門当時を描いた錦絵。緑と黒の柱が 1 本ずつ。他の 2 本は描かれていない。水引幕も描かれていない。行司は木村源吉で、裸足。軍配房の色が赤になっているが、間違いなく事実に反する。ここで取り上げた理由は、当時、四本柱が四色だったことを示すためである。

(6) 錦絵「天幕開大相撲土俵入之図」、明治 24 年 2 月、春宣画、学研『大相撲』(p.262)。

四本柱は四色。揚巻は赤で、両隣の緑柱と黒柱に一致しない。他の揚巻は不明。木村庄之助は北に背を向けている。

---

20 横綱西ノ海の在位期間は明治 23 年 3 月から明治 29 年 1 月までである。

21 白黒の錦絵は酒井著『日本相撲史（中)』(p.118) にもある。

(7) 錦絵「西ノ海横綱土俵入之図」、明治 25 年 5 月、春宣筆、私蔵。

露払い・千年川、太刀持ち・朝汐。緑と白の 1 本ずつ。他の 2 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕はない。木村庄之助は烏帽子姿で、軍配房は紫で、帯刀している。

(8) 錦絵「小錦と朝汐の取組」、明治 25 年 7 月、春斎筆、山室所蔵。

緑柱が 1 本で、もう 1 本の色は不明。他の 2 本は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村誠道は足袋で、帯刀していない。

(9) 錦絵「相撲弓取之図」、明治 26 年 3 月、『江戸・明治・大正　大相撲グラフィティー』(p.26)。

青色と白色の 2 本のみ。他の 2 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は描かれているが、揚巻はない。行司は草履を履いているが、軍配房は赤色。

(10) 錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 26 年 5 月、春宣筆、山室所蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫で、中央の揚巻は赤色。両隣の緑と黒に一致しない。行司は式守伊之助で、背を向けている。

西：八幡山／大戸平、達ノ矢、司天竜、谷ノ音

東：西ノ海／小錦、朝汐、響舛、千年川、北海

(11) 錦絵「大相撲土俵入之図」、明治 26 年 6 月、春斎筆、山室所蔵。

達ノ矢と大戸平の取組。四本柱は四色。水引幕は紫で、中央の揚巻は赤色。隣の赤柱と一致している。伊之助は赤房で、短刀を差している。

(12) 錦絵「勧進大相撲土俵入図」、明治 27 年 5 月、春斎筆、私蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫色で、中央の揚巻は赤色である。隣の緑柱と黒柱とは一致しない。他の 3 本の揚巻は描かれていない。伊

之助は背を向けて蹲踞している。

西：大碇、谷ノ音、大砲、鳳凰、海山、大戸崎、大纏

東：西ノ海、小錦、朝汐、千年川、外ノ海、若湊、響舛

届け日は明治 27 年 5 月となっているが、番付によると明治 28 年 6 月である。

(13) 錦絵「臺湾嶋臺南城外に於いて招魂祭之図」、明治 28 年 x 月、春英筆、私蔵[22]。

四本柱は四色。ただし、緑柱の代わりに黄色の柱となっている。水引幕は紅白で、揚巻は紫。他の 3 本の揚巻は不明。木村一学は足袋で、朱房。これは花相撲だが、四本柱が四色になっている[23]。

(14) 錦絵「回向院大場所土俵入之図」、明治 29 年 1 月、春斎筆、山室所蔵。

四本柱は四色。中央の揚巻は赤色で、両隣の白柱や黒柱と一致しない。他の揚巻は不明。伊之助は赤房で、顔を向けて蹲踞している。

東：小錦、朝汐、千年川、外ノ海、若湊

西：大碇、谷ノ音、大砲、鳳凰、海山

この錦絵の届日は明治 29 年 1 月となっているが、番付は明治 28 年 6 月である。

(15) 錦絵「小錦横綱土俵入之図」、明治 29 年[24]、春斎筆、『図録「日本相撲史」総覧』(pp.42-3)。

露払い・逆鉾、太刀持ち・朝汐。青色と白色の 2 本柱。他の 2 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村庄之助は烏帽子を被り、草履を履いている。

---

22 白黒印刷の錦絵は『大相撲人物大事典』(p.32) でも見られる。

23 この錦絵が明治 28 年頃に描かれていれば、一学は十両格か幕内格である。一学はその頃兵役中だった。これに関しては、拙稿「明治 30 年以降の番付と房の色」(2009) でも少し述べてある。

24 横綱小錦の在位期間は明治 29 年 3 月から明治 34 年 1 月までである。

(16)　錦絵「小錦横綱土俵入之図」、明治 29 年 6 月、春斎筆、山室所蔵。

露払い・逆鉾、太刀持ち・源氏山。緑と白の柱が 1 本ずつ。他の 2 本は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村庄之助は烏帽子で、帯刀している。

(17)　錦絵「勧進大相撲取組之図」、明治 29 年 6 月、春斎筆、私蔵。

大砲と鳳凰の取組。四本柱は四色。揚巻は緑色で、両隣の白や黒のいずれにも一致しない。他の揚巻は不明。式守伊之助は紫房で、帯刀している。

西：大砲、松ケ関、天津風、當り矢、狭布里、雷山

東：鳳凰、大蛇潟、小天竜、小松山、大纏、鬼ケ谷

5.　明治 30 年から明治 45 年までの四本柱

この期間にはこれまでより相撲の本がたくさん出版され、四本柱に関する資料もそれだけ多くなっている。ほとんどの本で四本柱が四色であることを認めることができるが、中には依然として四色以外の色を認めているものもある。同時代に両方の記述があれば、どれが正しいかを吟味しなければならない。事実は一つだからである。異なる記述の代表格は、『相撲新書』（M32）と『相撲大鑑』（M42）である。他の本は四色としている。

錦絵で示すように、この期間も四本柱は四色だったことが分かる。したがって、明治 2 年以降、明治 45 年までずっと四色は堅持されていたことになる。『相撲新書』（M32）と『相撲大鑑』（M42）で異なる記述がしてあるのは、事実の確認をせず、江戸時代の写本をほとんどそのまま紹介してあるからである。当時の四本柱の色に注意すれば即座に色が認識できたはずだが、結果的にそれを怠ったのである[25]。後から考えれば簡単に気付きそうな事実であっても、執筆当時はそれについて勘違いをしていることもある。

[25] 相撲に関して論じているものがすべてを自分の目で確認しているわけではない。中には思い違いをしているものもあるし、中には他の著書から得た知識もある。事実は確認できないが、四本柱の色に関する限り、そのように判断したくなる場合がある。

それでは、この期間の文字資料をいくつか示す。

・　『相撲新書』（M32）

「四本柱は四季に象りたるもにて東は青色の絹を以て巻き、これを春となし、西を白き絹にて巻き、これを秋となし、南を赤き絹にて巻き、これを夏となし、北を黒き絹にて巻き、これを冬としたるが、この古例はいつの間にか廃せられて現今の形となれり」（p.242）

この記述ではっきりしないのは、四色だったのがいつの間にか「現今の形」になったという部分である。「現今の形」というのは、おそらく、四色でないということである。具体的な「色」は推測するしかないが、歴史的な背景を考慮すれば、「紅白色」か「赤色」である。では、当時の四本柱はそのいずれかの色だったのだろうか。事実は、やはり「四色」だったに違いない。というのは、他の文字資料でも四色に反する記述はないし、錦絵の四本柱も四色で描かれているからである。これだけの錦絵の四本柱の四色を見て、それでも当時は「紅白色」か「赤色」だったと主張することは無理である。残る課題があるとすれば、なぜ、相撲に詳しい著者（上司氏）が『相撲新書』（M32）で当時、四本柱が四色でないと書いたかを解明することである。その理由ははっきりしないが、これまでも指摘してきたように、江戸時代の写本をそのまま紹介したことにあるはずだ。つまり、故実の由来を紹介することまではよかったが、四本柱の色の変遷に注意せず、当時の色を認識していなかったに違いない。

次の示す『相撲全書』（M32）、『四本柱：相撲叢談』（M33）、『相撲史伝』（M34）、『相撲大観』（M35）、『日日』（M42.6.2）などはすべて、四本柱は四色だったとしている。

・　吉村編『相撲全書』（M32）

「四本柱は四季に象る。東は春なれば青色の絹にて巻き、西は秋なれば白絹にて巻き、南は夏なれば赤色の絹を用い、北は冬なれば黒きを用いたり」（p.38）

・　上島編『四本柱：相撲叢談』（M33）

「巽（たつみ）の柱は春に表し青き絹を以て巻き、乾（いぬい）の方柱は秋に表し白絹を用い、坤（ひつじさる）は夏に表し赤絹にて巻き、立艮（たてうしとら）の柱は冬に表し黒き絹にて巻く」（p.11）

・　『相撲史伝』（M34）

「土俵に付属したる四本柱を青、黒、赤、白の四色を以て巻くは彼の青龍、白虎、朱雀、玄武に象るものにて青龍は春にして東なり、白虎は秋にして西なり、朱雀は夏にして南なり、玄武（玄は黒也）は冬にして北なり」（p.142）

・　『相撲大観』（M35）

「土俵の四本柱を巻くに赤、白、青、黒四色の布を以てし、天幕の四方を絞りたる打ち紐および房も同じく赤、白、青、黒の四色に分けたるは、これ春夏秋冬の四季を表したるなり」（p.32）

・　『日日』（M42.6.2）[26]

「土俵は写真版として掲げたるごとく屋根は破風造りとし、四本柱には青黄黒白の布を巻き、（後略）」

このように、多くの本や新聞記事の文字資料によると、四本柱は四色である。これだけで十分に裏付けとなる証拠は得られているが、次の『相撲大鑑』（M42）には四本柱は「紅白色」であるという記述がある。

・　『相撲大鑑』（M42）

「四本柱は元四季を表せしものにて、東を春とし青き絹を以て巻き、西を秋とし白き絹を以て巻き、南を夏とし赤き絹

[26] 『朝日』（M42.6.3）には「二本柱には紅白萌黄黒の布を用い」とあるが、「二本柱」は、おそらく、「四本柱」のミスに違いない。他の 2 本柱が赤や紅白の布で巻かれたとする資料は見たことがない。

を以て巻き、北を冬とし黒き絹を以て巻く古例なりし、然るに今は一様に赤き絹を巻き、その上を白き絹または白木綿にてぐるぐると巻くこととなれるなり」（p.320）

これは明治 40 年代に出版されているので、その記述が正しいかどうかは比較的簡単に判断できる。まず、『日日』（M42.6.2）の記事に、四本柱は四色だったことがはっきり書いてある。これだけでも『相撲大鑑』（M42）は、当時の四本柱の色を正しく書いていないことが分かる。

それでは、なぜ横綱でもあった著者（常陸山氏）がこのような記述をしたのだろうか。二つのことが考えられる。一つは、著者が常陸山氏でないことである。名目上は常陸山氏が著者に違いないが、実質的にはゴーストライターがいた。相撲に関しては、特に伝記物では、口述筆記をした人が書いてある。筆記する段階で、著者の余計な加筆修正が施される場合に、口述者と筆記者の間で違いが生じる。おそらく、『相撲大鑑』（M42）の四本柱の色もその一つであろう。もう一つは、四本柱の色の故実を述べる際、江戸時代の写本を活用したことである。特に、表現が酷似しているのは、『大相撲評判記』（天保 7 年）である。明治 42 年当時の四本柱が実際にどんな色だったかを確認すれば、「紅白色」で巻くという記述にはならなかったはずだ。

・ 『相撲と武士道』（M44）

「次に土俵に付属している四本柱であるが、これは四季に法ったもので、青、黒、赤、白、の四色の布で巻く。すなわち、礼記にある四神に倣ったもので、青龍は、春にして東、白虎は、秋で西、朱雀は、夏で南、玄武は（玄は黒）冬で北である」（p.81）

これは当時の四本柱の色だけでなく、故実の由来も忠実に述べている。明治 44 年当時の柱の色が四色だったことも認識していたに違いない。明治 42 年 6 月の国技館開館以来、四本柱は四色だと認知されるようになっている。

明治 30 年から明治 45 年までに描かれている錦絵を調べても、四本柱は四色である。明治 40 年代の錦絵についてはあまり注意しなかった。というの

は、本稿では、明治 30 年代の錦絵で色を確認できれば、40 年代は自然にその流れにあったと判断しているからである。

(1) 錦図「相撲の図」、明治 30 年 3 月、『角力新報』の口絵。

四本柱は四色。揚巻は 2 本とも赤色。他の 2 本は描かれていない。絵図全体は 7 コマ構成で、「相撲の図」はその一コマ。櫓下の広告は明治 30 年 1 月場所になっている。

(2) 錦絵「小錦横綱土俵入之図」、明治 31 年 5 月、玉波画、私蔵。

露払い・大見崎、太刀持ち・逆鉾。白と緑の柱が 1 本ずつ。他の 2 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。庄之助は烏帽子で、紫房。

(3) 錦絵「取組之図」、『風俗画報』（明治 32 年 2 月号）の表紙。

四本柱は四色。揚巻は四本とも赤色で、四本柱と一致しない。行司は足袋だけで、草履を履いていない。立行司ではない。

(4) 錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 32 年 9 月、玉波画、私蔵。

四本柱は四色。四色すべて確認できる。水引幕は紫色。行司は式守伊之助で、背を向けて蹲踞している。検査役は高砂、雷、尾車 3 名が描かれている。画面の上部に力士名が記されている。

東方：小錦、朝汐、常陸山、源氏山、逆鉾、稲川

西方：梅ノ谷、荒岩、鳳凰、谷ノ音、海山、松ケ関

(5) 錦絵「大砲横綱土俵入之図」、明治 34 年 4 月～明治 38 年 5 月[27]、玉波画。学研『大相撲』(pp.166-7)。

露払い・松ケ関、太刀持ち・荒岩。緑の柱が 1 本だけ。他の 3 本

[27] 横綱大砲の在位期間は明治 34 年 4 月から明治 41 年 1 月までだが、この錦絵がいつ描かれたかは分からない。露払い・松ケ関の最終場所が明治 38 年 5 月までなので、それ以前に描かれているに違いない。因みに、太刀持ち・荒岩の最終場所は明治 42 年 1 月場所である。

は描かれていない。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村瀬平は烏帽子で、紫房。

(6) 錦絵「幕内土俵入之図」、明治 35 年 5 月、玉波画、私蔵。

四本柱は四色。揚巻は赤で、隣の赤柱と一致。他の揚巻は不明。式守伊之助は背を向けている。

東：大砲、梅ケ谷、荒岩、国見山

西：常陸山、稲川、若湊、逆鉾

(7) 錦絵「常陸山横綱土俵入之図」、明治 36 年[28]、玉波画、『江戸・明治・大正　大相撲グラフィティー』(p.28)。

露払い・両国、太刀持ち・大湊。白の柱が 1 本。他の 3 本は描かれていないが、四色として推定。水引幕は描かれていない。伊之助は烏帽子で、紫房。

(8) 錦絵「常陸山横綱土俵入之図」、明治 37 年、玉波筆、境市博物館編『相撲の歴史』(p.78)。

露払い・両国、太刀持ち・稲川。1 本の柱が緑色。他の 3 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。庄之助は烏帽子で、紫房。

(9) 錦絵「大砲横綱土俵入之図」、明治 38 年 5 月、玉波画、『江戸・明治・大正　大相撲グラフィティー』(p.29)。

露払い・大戸崎、太刀持ち・太刀山。1 本は緑色で、もう 1 本の色は不明。他の 2 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は部分的に描かれているが、揚巻は不明。木村庄三郎は烏帽子で、軍配房は紫。

[28] 横綱常陸山の在位期間は明治 36 年 6 月から大正 3 年 5 月である。

(10)　錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 38 年 5 月、玉波画、私蔵。

白が 2 本で、赤と黒が 1 本ずつ。四本柱は四色として推定。前方の揚巻は赤色だが、他の揚巻は不明。

東：大砲、梅ケ谷、国山、太刀山、谷の音

西：常陸山、荒岩、駒ケ嶽、朝汐、稲川、両国

届け日は明治 38 年 5 月となっているが、番付は明治 39 年 1 月に準じている。両国が稲川より下位になっている。

(11)　錦絵「梅ケ谷横綱土俵入之図」、明治 38 年 5 月[29]、玉波画、私蔵。

露払い・鬼ケ谷、太刀持ち・谷ノ音。青柱が 1 本のみ。四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。庄三郎は烏帽子で、紫房。

(12)　錦絵「勧進大相撲土俵入之図」、明治 39 年 1 月、玉波画、私蔵。

四本柱は四色。水引幕は紫で、揚巻は赤色。この赤色は両隣の柱の色と一致しない。伊之助は背を向けているので、帯刀は不明。

西：常陸山、荒岩、駒ケ嶽、朝汐

東：大砲、梅ケ谷、高見山、太刀山

この錦絵の印刷日は明治 38 年となっているが、番付によると、明治 39 年 1 月である。

(13)　錦絵「相撲取組之図」、明治 39 年 7 月、玉波画、私蔵。

太刀山と駒ケ嶽の取組。白柱が 1 本のみ。他の 3 本は描かれていないが、四本柱は四色として推定。水引幕は描かれていない。木村庄三郎は赤房で、草履を履いている。

東：駒ケ嶽、浪ノ音、朝嵐、甲、小柳

西：太刀山、緑島、高見山、大崎

この錦絵は明治 38 年 5 月以前に描かれた可能性がある。という

[29] 横綱梅ケ谷の在位期間は明治 36 年 6 月から大正 4 年 6 月までである。

のは、明治 38 年 5 月に庄三郎は紫白房を許されているが、錦絵では朱房で描かれているからである。この番付は花相撲のものらしい。

(14) 錦絵「国技館大相撲土俵入り之図」、明治 42 年 6 月、玉波画、学研『大相撲』(p.263)[30]。

四本柱は四色。中央の揚巻は赤色だが、その色は両隣の柱のいずれにも一致しない。他の 3 本の揚巻は不明。行司は北を背にしている。

6. 特別な相撲

ここまでは普通の勧進相撲について調べてきたが、ついでに天覧相撲、奉納相撲、記念相撲などのような「特別な」相撲の四本柱の色についても簡単に触れておきたい。これらの相撲では、三種類の色が使われている。つまり、四色、紅白色、朱色である。どのような基準で色を使い分けたかは必ずしも明確でないが、大がかりな天覧相撲では紅白柱、小規模な天覧相撲では四色になる傾向がある。明治中期になると、天覧相撲でもときには四色の柱が使われている。要するに、天覧相撲では常に紅白柱が使われていたわけではない。どのような相撲でどのような色の柱が使われたかを簡単に見ていこう。色の使い分けと相撲の中身に何か関係があるかもしれないが、ここではその関係については特に言及しない。

A. 紅白色

明治 17 年の天覧相撲の四本柱は紅白色である。

(1) 錦絵「三都大相撲取組之図」、明治 11 年 9 月、学研『大相撲』(p.148)。

梅ケ谷と響矢の取組。四本柱は紅白。水引幕は朱色で、揚巻はない。行司の帯刀は不明。

---

30 学研『大相撲』(p.263) の錦絵では緑柱の色が鮮明でないが、他の本の絵図から「緑」が確認できる。国技館開館の土俵を描いた錦絵は多くの本に掲載されている。

(2) 錦絵「御濱延遼館於いて天覧角觝之図」、貞信画、明治 17 年 3 月、国梅画。山室所蔵[31]。

梅ケ谷横綱土俵入り。露払い・剣山、太刀持ち・大鳴門。四本柱は赤白。水引幕は赤白。中央が絞ってあるので、揚巻はあったはずだが、色は確認できない。木村庄三郎は赤房で、烏帽子を被っている。

(3) 錦絵「天覧相撲横綱土俵入之図」[32]、明治 17 年 3 月、豊信画、境市博物館編『相撲の歴史』(p.76)。

横綱・梅ケ谷、露払い・剣山、太刀持ち・大鳴門。四本柱は紅白。水引幕は紅白で、揚巻は紫。さらに、垂が水引幕の上部から数本垂れ下がっている。木村庄三郎は烏帽子で、朱房。

(4) 錦絵「宿弥神社祭典大相撲之図、明治 19 年、国明画、『国技相撲の歴史』(p.132)。

深川八幡神宮境内で行われた祭礼相撲。剣山と大達の取組。四本柱は紅白。水引幕は赤色で、揚巻はない。水引幕の上部から垂が数本吊るされている。木村庄之助は帯刀し、烏帽子を被っている。

(5) 錦絵「天覧相撲取組之図」、明治 17 年 3 月、豊信画、境市博物館編『相撲の歴史』(p.76)。

楯山と梅ケ谷の取組。四本柱は紅白。水引幕は紅白で、揚巻は紫。木村庄之助は烏帽子で、朱房。

(6) 錦絵「華族會舘角觝之図」、明治 20 年 2 月、国明画、山室所蔵[33]。

大達と剣山の取組。紅白柱。水引幕は赤で、揚巻はない。庄之助

---

31 白黒の錦絵は酒井著『日本相撲史（中)』(p.70）にもある。

32 梅ケ谷横綱土俵入りを描いた錦絵はいくつかあるが、その一つが画題「延遼舘天覧相撲横綱之図」(明治 17 年 3 月、月耕画）として『芸術新潮』(1993.7, pp.52-3）や学研『大相撲』(p.67）にも掲載されている。

33 白黒の錦絵は酒井著『日本相撲史（中)』(p.87）にもある。

は紫で、烏帽子を被っている。

B.　赤一色

赤一色の柱も慶事を表す色である。紅白色と赤一色にどのような違いがあるかは調べていないので、分からない。神社の境内で行なわれた相撲では、一般的に、赤一色である。

(1)　錦絵「弥生社天覧相撲」、明治 21 年 1 月、国明画、私蔵[34]。

海山と西ノ海の取組。四本柱は赤一色。揚巻の代わりに、紙幣が前方に 5 本垂れている。伊之助は烏帽子で、帯刀。

(2)　錦絵「延遼館大相撲天覧之図」[35]、明治 24 年 5 月、勝月画、私蔵。

画題に「延遼館」とあるが、実際は「靖国神社」の境内で行なわれた相撲を描いているようだ。西ノ海横綱土俵入りの図。露払い・一ノ矢、太刀持ち・鬼ケ谷。四本柱はすべて赤色である。柱の上部が 4 本とも白色に描かれているが、それは布を巻いていないことを表しているはずだ。水引幕はうす紫で、揚巻が 2 本吊るされている。その 2 本とも赤色である。4 ヶ所とも揚巻は赤いとして推定。木村庄之助は朱房で、草履を履き、帯刀している。烏帽子は被っていない。

C.　四色

時代が下るにつれて、天覧相撲であっても四色が使われている。

(1)　錦絵「豊歳御代之栄」、明治 14 年 5 月、山室所蔵[36]。

梅ケ谷と若島の取組。四本柱は四色。水引幕は紫。庄之助は紫房で、帯剣していない。この錦絵は明治 14 年 5 月 9 日、島津公別邸で行なわれた天覧相撲の取組を描いたものである（酒井著『日本相撲史（中）』(p.56)）。

34　白黒の錦絵は酒井著『日本相撲史（中）』(p.92) にもある。
35　同じ相撲の錦絵が別名「靖国神社臨時大祭之図」(明治 28 年 11 月) となっている。
36　白黒の錦絵は酒井著『日本相撲史（中）』(p.57) にもある。

(2) 錦絵「勇力御代之栄」、明治 17 年ころ[37]、国明画、出版人・松木平吉、山室所蔵。

梅ケ谷と剣山の取組。四本柱は四色。水引幕はあるが、揚巻はない。木村庄之助は烏帽子で、紫房。帯刀は不明。これは天覧相撲である。

(3) 錦絵「方屋開式之図」、明治 31 年 5 月、学研『大相撲』(p.67)。

緑と黒の柱 1 本ずつ。四本柱は四色として推定。天覧相撲の方屋開き。水引幕は赤色で、揚巻は緑色。他の揚巻の色は不明だが、おそらく、隣の柱の色と一致しているに違いない。木村庄之助は烏帽子を被っている。

このように、相撲によっては四本柱の色に違いがある。それには何らかの理由があるはずだ。そうでなければ、たとえば、天覧相撲には同じ色が常に使われていてもよい。しかし、同じ天覧相撲であっても、四色、紅白色、赤色というように、色が違っている。本稿ではそのような違いについては深く立ち入らないことにした。これは今後の研究課題の一つである。

7. おわりに

本稿では、明治時代の勧進相撲の四本柱が四色であったことを示した。その論拠は絵図資料や文字資料だったが、特に絵図資料では満遍なく年代を追ってその証拠を提示することができた。これだけの証拠があれば、四色以外の色も使われていたと主張するのは無理である。錦絵では、確かに、必ずしも四色が描かれているわけではないが、それは絵の見栄えのために敢えて別の色を意識的に使ったのである。特に赤色以外の色が使われていたとき、そのように判断せざるを得ない。もしかすると、相撲に詳しくない絵師が描きながら、有名な絵師の名前を使った可能性もある。錦絵に記されている絵

[37] 正確な年月は定かでないが、取組んでいる力士と国明の活躍時期から明治 17 年頃と推測している。

師がすべて必ずしも直接描いていないかもしれない。そのような問題点はあるかもしれないが、「四色」であることが分かれば、本稿としてはそれで十分である。

本稿では東京の勧進相撲を対象としたが、錦絵の中には大阪相撲を描いてあるものもある。同じ土俵で扱うとすれば、大阪相撲と東京相撲が同じ慣例に従っていたのか、それとも異なる慣例に従っていたのかを見極めなければならない。たとえば、大阪相撲の横綱土俵入りの錦絵を見ると、柱が紅白色の場合が多いという印象を受ける。詳しくは調べていないので断言できないが、この二つの相撲協会（団体）は必ずしも「同じ時期から同じ慣例」に従っていなかったようである。その辺の事情をもう少し吟味しなければならないので、本稿では大阪相撲による勧進相撲は対象外とした。

最後に、四本柱の色で解決したいのは、勧進相撲以外の「特別な」相撲である。同じ天覧相撲でも異なる色の四本柱が使われているし、神社などの相撲でも異なる色が使われている。何か一定の基準があるはずだが、それについて詳しく調べることはできなかった。この延長線上に、昭和時代の「特別な」相撲がある。戦前の昭和時代には、勧進相撲以外に、力士は多くの相撲に参加し、相撲を取っている。その「特別な」相撲には天皇陛下だけでなく、華族、軍人、高官などが観戦している。おそらく、柱の色をどうするかは常に問題になったはずだ。それを決定する基準もあったに違いない。明治時代にも相撲の種類によって柱の色が使い分けされていたことは確かである。何らかの基準があったかもしれないので、それを調べる必要がある。本稿では、勧進相撲以外の相撲の色についてはその存在を認めていながら、その四本柱は対象外としてある。

参考文献

岩井左右馬、安永 5 年、『相撲伝秘書』（写本）.

『江戸相撲錦絵』（『VANVAN 相撲界』（1986 新春号））、ベースボール・マガジン社.

『大相撲』（学研）、戸谷太一編、昭和 52 年、学習研究社.

『大相撲展』（小冊子）、八戸市博物館編集・発行、2003.

『大相撲人物大事典』、『相撲』編集部、2001、ベースボール・マガジン社.
大西秀胤、明治 28 年、『相撲沿革史』、国文社.
岡本半渓、明治 27 年、『相撲宝鑑』、井口松之助（発行者）.
景山忠弘編著、1994、『江戸・明治・大正大相撲グラフティー』、カタログハウス.
金指基、2002、『相撲大事典』、現代書館.
上司延貴編著、明治 32 年、『相撲新書』、博文館.
香山磐根、昭和 60 年～61 年、「相撲錦絵の吟味—四本柱の色の変遷（上、中、下）」『相撲趣味』（第 88 号、第 89 号、第 92 号）、相撲趣味の会.
木村喜平次、正徳 4 年、『相撲家伝鈔』（写本）.
木村政勝、宝暦 13 年、『古今相撲大全』（写本）/ 木村清九郎（編）、明治 17 年、『今古実録相撲大全』.
『国技相撲のすべて』（別冊相撲夏季号）、昭和 49 年 7 月、ベースボール・マガジン社.
『国技相撲の歴史』（別冊相撲秋季号、昭和 52 年 10 月、ベースボール・マガジン社.
酒井忠正、昭和 31 年／39 年、『日本相撲史（上・中）』、ベースボール・マガジン社.
『相撲』、日本相撲協会（監修）、昭和 53 年、保育社.
『相撲浮世絵』（大谷孝吉コレクション）、平成 8 年、発行者・大谷孝吉.
『相撲浮世絵』（別冊相撲夏季号）、昭和 56 年 6 月、ベースボール・マガジン社.
『相撲の歴史—境・相撲展記念図録—』、堺市博物館制作、1998 年 3 月.
『相撲百年の歴史』、池田雅雄編、昭和 45 年、講談社.
『図録「日本相撲史」総覧』（別冊歴史読本）、1992、新人物往来社.
『なんでもわかる相撲百科』（相撲別冊）、1962 年 11 月、ベースボール・マガジン社.
根間弘海、1998、『ここまで知って大相撲通』、グラフ社.
根間弘海、2006、「土俵の揚巻」『専修経営学論集』第 83 号、pp.245-76.
根間弘海、2006、『大相撲と歩んだ行司人生 51 年』（33 代木村庄之助と共著）、英宝社.
根間弘海、2007、「行司と草履」『専修経営学論集』第 84 号、pp.185-218.
根間弘海、2007、「朱房と草履」『専修経営学論集』第 85 号、pp.43-78.
根間弘海、2008、「明治 43 年以前の紫房は紫白だった」『専修経営学論集』第 87 号、pp.77-126.
根間弘海、2009、「行司の帯刀」『専修人文論集』第 84 号、pp.283-313.
根間弘海、2010、『大相撲行司の伝統と変化』、専修大学出版局.

根間弘海、2010、「立行司も明治 11 年には帯刀しなかった」『専修人文論集』第 87 号、pp.199-234.

根間弘海、2010、「草履の朱房行司と無草履の朱房行司」『専修経営学論集』第 91 号、pp.23-51.

根間弘海、2010、「上覧相撲の横綱土俵入りと行司の着用具」『専修経営学論集』第 91 号、pp.53-69.

常陸山谷右衛門、明治 42 年、『相撲大鑑』、文運社／復刻版（昭和 60 年）.

『風俗画報』第 182 号、明治 32 年 2 月、東陽堂.

古河三樹、昭和 43 年、『江戸時代大相撲』、雄山閣.

枡岡・花坂、昭和 53 年、『相撲講本』（復刻版）、誠信出版社 / オリジナル版は昭和 10 年.

三木愛花、昭和 3 年、『江戸時代之角力』、近世日本文化史研究会.

三木愛花、明治 34 年、『相撲史伝』、曙光社.

三木貞一・山田伊之助編述、明治 35 年、『相撲大観』、博文館.

和歌森太郎、昭和 38 年、『相撲今むかし』、河出書房新社.